

一九三九年不可侵協定への独ソ交渉の端緒

北島平一郎

目次

- 一 はしがき
- 二 英仏宥和政策の放擲とナチス・ドイツ
英仏両国の保障政策とヒットラー四・二八国会演説
策戦・白
- 三 ナチス・ドイツとソ連
包囲網と包囲網
独ソ通商条約の更新
スターリンの党大会演説
- 四 英仏独ソ四国と相互援助・不可侵協定
スターリン外交
ドイツと英国
- 五 独ソ不可侵協定の締結へ
ポーランド分割への言及
リッペントロップの指令
- 六 あとがき

一 は し が き

一九三九年八月二三日、独ソ両国間に相互不可侵協定が締結された。これは、第二次世界大戦勃発の引き金を構成した条約で、その意味するところは、何にたとえ様もない程の重大さをもっていた。二〇世紀最大最悪のそれと称して恐らく過言ではなからう。これは即ちビスチュラ河を以て東西にポーランドを分割し、夫々の部分をソ連とドイツで分け取りすることを踏まえて両国相互の不可侵を誓約したものであった。一九三三年ヒットラーが、ドイツ宰相となって以来、それはソ連に反抗をつづけ、ボルシェビキと共産主義を攻撃してやまなかった。それが一転してこの友好である。昨日の淵ぞ今日の瀬となるという表現どころの騒ぎではない。ドイツとソ連は、一九一九年後、双方、第一次世界大戦敗戦と被疎外国として、一九二二年にラッパロ秘密条約を締結して両国友好をうちたて、両国軍事的協調、協働を⁽¹⁾実行した。この関係は、世界各国から当然の響燈を買ったが、ヒットラー政権となって、反ソとなったのであった。しかもその対ソ攻撃の激しき、執拗さは、別の意味で響燈を買う程であった。それが、ヒットラー台閣に上って六年半で、突如この変化であった。しかし、この変化は事態が、静かになって動かなくなってしまうという⁽²⁾ことではない。いわば噴火口が静かになって、また別の場所でふき上がったようなものであった。それは、ヒットラーの暴力的驀進の結果引起されたベルサイユ条約軍事条項の廃棄（一九三五年）、ラインランド奪回（一九三六年）、オーストリア併合（一九三八年）、ズデーテン地方割取（一九三八年）、チェコスロバキア解体（一九三九年）、メメル占領（一九三九年）と続く欧州の大変動に、それまで、これらを宥和政策の名の下に黙認しつづけてきた英仏両国が、ここへきて、突如態度を一八〇度変え、一九三九年三月末日を以て、ヒットラーの次の侵略目標であるポーラン

ドに独立領土一体の安全保障を与えたことからヒットラーの次の一手として考え出されたものであった。即ち、英仏両国は、同様の保障をこの時期、ルーマニア、ギリシア、更にトルコにまで及ぼして与え、これは、当然西欧デモクラシー諸国によるヒットラー包囲、彼の封じこめを結果するものであったからである。こうして当然、包囲網には、それを破る一段の包囲網が考えられねばならない。ここで英仏の包囲網を許すことはヒットラーにとっては出来ない。そうなる、西をせかれた彼にとっては、出るところは東である。それしかない。こうしてソ連が当然浮かび出、ヒットラーも一八〇度の転換をとげて、これと手をにぎるのであった。これが独ソ不可侵条約であった。これが当時、驚天動地の大変革であったことはいふ迄もなく、西欧デモクラシーを尻へに墮若たらしめた事は疑いない。しかしあわれ、その後の発展は、ヒットラーは、英国攻撃に失敗し、ソ連と手切れになって遮二無二同盟国ソ連に戦いを挑む。そして失敗してベルリン総統官邸の地下壕で命を絶つ。全く絵に描いたようにナポレオン一世の徹を踏んで欧州覇権の確立に失敗し終るのである。槿花一朝の夢、仇ヶ原の朝の露とは、正にこのことであろう。一瞬の安堵と力の誇示を許したヒットラーの独ソ不可侵協定の内容は次の如くであった。

独ソ不可侵協定並に秘密附属議定書、一九三九年八月二三日モスコウに於て調印。

ドイツ国政府と

ソビエト社会主義共和国連邦政府は、

平和の基礎を強化し、一九二六年四月にドイツとソ連邦間に締結された中立条約の主要条項を演繹することを望んで次の協定を締結することに合意した。

一条 締約国は、夫々、単独、若しくは他国と連携して、一方に対し、暴力、侵害、攻撃の如何なる行動にも出な

いことを誓約する。

二条 もし締約国の一方が、第三国の戦争行動の目的とされる場合、他方は、該第三国に一切の支援を与えない。

三条 締約国は、彼等の共通の利害に関係する情報交換の為、会談を開く目的で継続的に接触する。

四条 締約国は、他方を直接間接にターゲットとする一切の国家連合に加入しない。

五条 万一、締約国間に一種或いは別種の論争なり紛争なりが惹起した場合には、双方は、これら争いを排他的に、意見の友好的交換により、或いは必要とあらば、仲裁委員会の設立によって解決することを義務とする。

六条 条約は一〇年期限とする。但し、締約国の一方が、期限に先立つ一年以前にこれを廃棄しない場合には、これは自動的に五年間延長される。

七条 条約は、最も速やかに批准されねばならない。批准書の交換は、ベルリンでなされる。条約は、調印と同時に発効する。正文は、独露両語である。

ドイツ国政府代表 V・リッペントロップ

ソ連邦政府全権委員 V・モロトフ

秘密議定書

ドイツ国とソビエト社会主義共和国連邦全権委員は、両国間不可侵協定の調印に当り、これに署名を行ったが、その際、東欧州の両国間勢力範囲画定の問題につき厳格なる秘密裡に談合し、次の結論に到達した。

1 バルチック諸国（フィンランド、エストニア、ラトビア、リスニア）関係地域に於て、領土的・政治的再編

成が行われる場合には、リスアニア北辺国境が独ソ两国勢力範囲の境界となる。この關係に於て、ビルナ地域に於けるリスアニアの權益は締約国双方によって認められる。

2 ポーランド国に属する地域に於て、領土的・政治的再編成が行われる場合には、独ソ两国夫々の勢力範囲は、ほぼナレウ、ビスチユラ、サン河の線を以て境界とする。

独立ポーランド国を維持する願望ありやにつき締約国双方の利害の問題、その場合の該国国境画定の問題は、今後の政治的發展の過程に於て決定されなければならない。

如何なる場合にも两国政府は、この問題を友好的協商の手段を以て解決する。

3 南東欧州に關し、ソ連側は、ベッサラビアに於けるその權益につき注意を喚起する。ドイツ側は、該地域に完全な政治的無關心を表明する。

4 この議定書は双方により厳秘に附される。

モスコウ 一九三九年八月二三日

ドイツ国代表

V・リップベントロップ

ソ連邦政府全權委員

V・モロトフ⁽²⁾

この内容は一読して容易に諒解される。従つて喋々の説明は省く。右と左の二つの独裁国がこの悪業の大晴業をやつてのけた。西欧デモクラシーは、左の独裁国と手を組んで右の独裁国を攻め、これを亡ぼす。この為、ソ連とスターリンのその後の躍進は、世界史上空前のそれとなる。大英帝国は、二つの世界大戦に疲弊して昔日の面影無く、世界というより地球は、米ソ兩超大国にキッチリ二分された。スターリンの声望、権力、權威は、世界史上比すべきも

のがなかった。ただ一人の手中にこれだけのそれらを握ったものを恐らく世界史は知らないであろう。

しかし果して、西欧諸国は、その必要があったのだろうか。ヒットラー・ドイツは、しかくそれ程強力堅固無敵であったのであろうか。この時、ソ連とりこみには、英仏も手を拱いていたわけではなく、それはヒットラーの独壇上ではなかった。そこには、ソ連、英仏独四国の間に激しい結合戦争があった。しかし英仏は、これにしかく熱心ではなく、はやりにはやったのはヒットラーであった。そして英仏の態度が、正しかったのではないか。第二次世界大戦勃発を予見し、覚悟した英仏の態度、少なくともN・チェムバレンの態度が、正しかったのではないか。更に少なくとも、独ソ戦がはじまったとき、西欧デモクラシーの戦争は、もっと慎重になるべきではなかったか。疑問と詮索はつきない。

今一つの問題は、独ソ不可侵協定に関する秘密性である。その経過、資料等は、何も残っていないと言って言いすぎではないと考えられる。ドイツ側のそれは、敗戦と共に明らかになっているが、全く限られているようである。ポーランド分割問題は、五月はじめからとり沙汰されて、九月頃からベルリンで全市的なうわさになっている、というが、これについても時のソビエト代理大使（ベルリン駐劄）さえこれを知らないようだと言われる。（これについては、稿を改めて他日、公刊の資料だけでもいますこし精査したい。）それよりも恐ろしいのは、日伊両国共、独ソ不可侵協定とポーランド分割については何も知らなかったことである。二国のこれに関する不知は、見事というほかない如くである。例えばチアノ（Galeazzo Ciano）イタリア外相は、この五月九日前後には、ローマを訪れたリッベントロップ（Joachim von Ribbentrop）独外相、日本の駐伊白鳥大使等と会談して日独伊三国同盟の話等を交わしている。独ソ間ポーランド分割など全く知らなかったようである。彼自身、五月二一日から二四日までベルリンを訪問し、

八月一日から一三日までザルツブルクで、リッペントロップ、ヒットラーと会談しているが、これについても右と同断である。何も知らされず、また情報もキャッチしていない。八月二日、チアノ外相はリッペントロップ外相に電話し、ブレンネル峠で会見を申入れたが、後者はこの日重大な政治協定締結の為にモスクウに飛ぶので、会見場所をインスブルックにして欲しいと言ひ、ここではじめてイタリヤは、独ソ不可侵協定締結の事を知るのである。インスブルックは、この時のモスクウへの中継地であった。そして協定の内容を知るのはこの後のことである。⁽³⁾この事実について、百万言のコメントが出来るし、又必要であろう。しかしただここには、全くこの事実は恐ろしいことであると言ふにとどめたい。チアノ日記では、八月二三日、日本についてこうのべる。日本は抗議している。東京からのニュースは彼等の不満足で満ちている。特にこの時まで日本が無視されていたということが強調されている、と。

日本はこの時、ノモンハン事変の真只中で（一九三九年五月一日・戦鬪勃発、八月三日・日本軍敗北、九月一日・停戦協定、九月一六日・休戦）、また日独伊三国同盟締結に向つて軍主導で幕進中であつた。独ソ不可侵協定など、知るも知らぬもない情況であつた。チアノ日記のとく通りである。八月二日にリッペントロップよりソ独不可侵協定締結を大島大使に通報されてはじめてこれを知るのである。そして翌々八月二五日、閣議、三国同盟交渉打切を決定（最終的には一九四〇年九月二七日、日独伊三国同盟調印）、独の防共協定附属秘密協定違反を抗議方大島大使に訓令（9・18大島執行）、ということになり、次いで、八月二八日、平沼騏一郎内閣（外相有田八郎）総辭職、三〇日、阿部信行内閣（外相阿部信行、野村吉三郎）成立ということになる次第であつた。⁽⁴⁾ここでもこれらの事実は、全く恐ろしいことである、というにとどめたい。

小論は、独ソ不可侵協定締結に向つての独ソ交渉の端緒（独ソ通商協定の更新）からその締結への経過を取扱ふ。

英仏ソ三国交渉、独ソ不可侵協定締結の最終局面等は、稿を改めることとした。しかして全くこの不備な小論に対する大方の御叱正、御教示を乞い上げ、これらを得て問題解明に資するを得ば、筆者望外の喜びであります。

論

- (1) 現代外交史、拙著、創元社、一九七九年・第一版、一九八九年・第六刷、一九九一年・第二版発行、第五章・第三節・独ソ兩國最初の接近、二〇〇—二〇四頁。
- (2) *Le Complot contre La Paix, 1935-1939, Jean Montigny, La Table Ronde, 1956, pp. 238 et 241-49. Histoire de la Diplomatie, publiée sous la direction de Vladimir Potemkine, Tome III, 1919-39, Librairie de Médecis, 1947, pp. 710-13. Documents on International Affairs, 1939-46, vol. I, March-September, 1939, edit. & sel. under the direction of A. J. Toynbee, Oxford Univ. Press, 1951, pp. 408-410, henceforth mention as DIA.*
- (3) *Ciano's Diary, 1939-43, edit. with intro. by Malcolm Muggeridge, Foreword by Sumner Welles, Heinemann, 1st pub. 1947, reprinted 1950, pp. 81-85, 90-93 and 130-32.*
- (4) 日本外交年表並主要文書、下、外務省編纂、蔵版、原書房発行、昭和四一年、年表、一九三九年、一二八頁。

二 英仏宥和政策の放擲とナチス・ドイツ

英仏兩國の保障政策とヒットラー四・二八国会演説

一九三九年三月一五日、ヒットラーによるチエッコスロバキアの解体後、英仏兩國は、遂に年来の対独伊宥和政策を一擲。チエッコ隣接東欧・バルカン半島の中近東の国々に独立領土一体性保障を實質とする安全保障を与えるに至った。三月一二日、英国とトルコとの間に相互援助と地中海現状変更の危険なる侵略に対する共同行動をうたう兩國宣言が発出され、これは三月一九日・英国対ルーマニア(保障予約)、三月三一日・英国対ポーランド(暫定相互援

助条約、四月六日）、四月一三日・英仏兩國対ルーマニア、ギリシア保障へとつづいた。英仏兩國の力政策は、欧州中原から東欧にかけて幅広い、又奥深い保障の網を打ち、その中にこれら地域の国々を包みこむこととなった。実に英国について言えば、その何百年の伝統たる対中東歐孤立策（トルコ問題を除く）を捨て去ったことになる。由々しき決意であり、またそれだけ欧州情勢が逼迫していたともなる謂であった。その後、戦争破裂の危険度の高まりと共に、八月二五日、英国は、最も被侵略の危険性高いポーランドに関して、該保障を兩國相互援助協定の次元にまで高めることとなる。

この英仏兩國の保障政策採用に対し、ヒットラーは激怒した。そして四月二七日に至り、英国が徴兵法の発布に踏切ったことを機会として、一九三五年英独海軍協定を破棄した。英国の一連の行動は、欧州の平和の基礎をおびやかし、英独海軍協定の存立基盤は失われたと主張するものであった。この言明は、翌二八日、春酣の午後国会に於て行われた。このヒットラーの演説は二時間をこえる長大なもので、その放送は、全ドイツ、欧州の主要部分、米國とほとんど全世界にわたった。これは米ルーズベルト大統領のヒットラーに対する平和提案に反撃的答えを行う為でもあった。そのスピーチの中で、彼はポーランドにつき次のようにのべた。英国に対する彼の友情は、英国の対ドイツ不信によって裏切られた。ポーランドに対するダンテヒと所謂廻廊のドイツへの返還要求こそは、欧州平和の基礎である。ポーランドは誤れる国際的圧迫の下にこの要求を拒否し、軍隊の召集をさえ義務と感じている。ドイツは一兵の召集も行っていない。ドイツ要求の拒否は後悔されるだろう。ドイツは断じてポーランドを攻撃しない。攻撃を主張するのは、為にする国際的ジャーナリズムの虚言にすぎない。それは、ポーランドをしてドイツに対する軍事行動を不可避とする協定を英国との間に締結させた。ポーランドの行為は、大胆にすぎる。しかし、ドイツはこれを看

説論

過することを得ない。「かくしてポーランドは、独ボ不可侵協定を破った。余の見解によれば、それはポーランドの一方的行為によって侵害された。これにより、独ボ不可侵協定は、既に存在していない」。ヒットラーは反ポーランドの論理をこのように展開した。そしてヒットラーは、同協定を破棄したのであった。この演説中のポーランド攻撃せずの言明にもかかわらず、ヒットラーは既に武力を以てダンチッヒ、廻廊の奪回を決定していた。「策戦・白」である。それは四月三日、英国の対ボ保障宣言の四日後であった。その要録、次の如し。

策戦・白

極秘「策戦・白」

1 政治的要請と目的

ポーランド軍事力の破砕、東部に国防必要線を確保し、「ダンチッヒ自由地域」を可及的速やかに独領宣言する。戦争をポーランドに限局する。フランスの国内危機の増大と英国の注目が、該情勢作出を遠くない時期に可能にする。ロシアの介入は考えられない。イタリアの態度は、独伊枢軸に依拠する。

2 軍事的結論

独軍の建設は、西欧デモクラシーの敵対によって決定され継続される。「策戦・白」はその補完的役割をになう。ポーランドの孤立化は、策戦が電撃的決定的一撃によってはじまれば、戦闘破裂の後も容易に可能となる。

3 軍の任務

国防軍のボ軍破砕の為、電撃戦が目ざされ、準備されるべし。

ダンチッヒ

有利な政治情勢を開発することにより、「策戦・白」から独立にダンテツヒの電撃的占領が実現され得る。……占領は、東プロシアから遂行される。海軍は、海上から陸軍の行動を支援する。

附属命令

- 1 一九三九年九月一日以降、軍事行動が何時にても実行し得る如く準備がすめられること。
- 2 軍最高司令部（OKW）は「策戦・白」の時間割作成の責に任じ、国防三軍の時間的協力を図るべし。
- 3 三軍の計画と時間割の詳細は、一九三九年五月一日迄に最高司令部に提出すること。⁽³⁾

(1) *histoire diplomatique de 1919 à nos jours*, Jean-Baptiste Duroselle, 10e édition, Dalloz, 1990, pp. 236-40. D.I.A. op. cit., 1939, pp. 87-130. すでに早く一九三八年一〇月頃からポーランドのドイツ少数民族問題が激しさを増し、ドイツ人のドイツ回帰がはじまっていた、という事情もたしかに存在した。反対にドイツは十一月、一万五千人に及ぶポーランド系ユダヤ人をドイツから追放した。ダンテツヒ問題は、一〇月二四日からドイツによってポーランド側に持出されている。

(2) *ibid.*, p. 214. *Histoire de la Diplomatie*, Vladimir Potemkine, op. cit., pp. 685-88. ヒットラーは、チエッコの解体は、平和確立の為の不可避の貢献であったと称した。尚、ルーズベルトの提案に関しては、こうもいつている。ダンテツヒはドイツ都市であり、米国の圧迫にかかわらず、それはドイツの手によって解決されなければならない問題であるのだ、と。そしてヒットラー、ムッソリーニの破天荒な行為は際限がなく、ルーズベルトがあげたドイツに圧迫されているという所謂小国群に、彼等はその実があるやなしやを質問し、その大部分から否定的なこたえを獲得しているのである。ヒットラーの四・二七スピーチは、以下の如く要約出来る。

① ミュンヘン協定は、本来正義と権利に背反するものである。② 英独海軍協定は、英国の新独包囲網政策の前にその基礎を失った。③ 独ポ不侵略宣言も同様である。ポーランドは英国の使暎の下にそれと提携し、何時の日かドイツと干戈をまじえんとしている。この故に二協定は存在の意義を失い、廃棄される。④ ドイツは一九一九年ベルサイユにいった。それは話し合いの為でなく、ただ決定を遵守、履行する為だけであった。ルーズベルトは何を言ってもドイツは再びこの愚行をくり

かえさない。⑤ダンテッヒと回廊を横切る鉄道と自動車道路は、ドイツの最後の要求であり、平和を購う唯一の代償であった。しかし、これをにべもなく拒否されたとはいへ、ドイツはポーランドを攻撃する意図は断固ない。戦争の噂は、新聞の捏造である。

(8) D. I. A. 1939-46, vol. I, March-September 1939, op. cit., pp. 130-34.

三 ナチス・ドイツとソ連

包囲網と包囲網

ヒットラーのチエッコスロバキア突出によって大変動となった東欧世界は、英国の決断とフランスの追随によって、これを包みこむように英仏の防衛線がチエッコの外延、ポーランド、ルーマニア、はてはギリシア、トルコにまで及び、はりわたされた。そのさらに東には、ヒットラー垂涎の沃野ウクライナを抱えるソ連邦がひろがっている。ヒットラーのメイン・カンフに吐露されている思想から、ナチス、ソビエト関係は、敵対的である。東をせかれ、その奥にソ連といういわば天敵をかかえるヒットラーの運命は、いかになるか。誰しもの思いは、そこに至る。英仏の政策転換の効果は、大きな得点をあげたのか。しかし、欧州の運命は、この時、突如変わる。ナチス・ドイツ、ソビエトの接近、結合である。ヒットラー、スターリン以外、何人もこれを予想しなかった。チェムバレン(Neville Chamberlain)もダラヂェ(Edouard Daladier)も予想外であつたらう。彼等は、自己の有和政策放棄に興奮して、他をかえりみなかった。チェムバレンが、この時、スターリンの接近をにべもなく拒絶するのがその証拠である。しかし、運命は常に自ら変る。為政者は常にルビコンを渡る。ヒットラーは包囲網を突き破って再び頭をもたげ、スターリンは資本主義諸国をして相互に争闘にふけらす原則を忠実に実行する。かくして天敵ナチス、ソビエトは結合し、

暗雲は欧州の空に垂れこめるのであった。⁽²⁾

独ソ通商条約の更新

ヒットラーの前述の四月二八日スピーチの中で、彼は恒例のソビエト批判、攻撃を一言も行わなかった。これは由々しき変化であり、誰の眼にもこの変化は明白に観取された。そして、当然ポーランドを防共協定(Anti-Comintern Pact)へ誘引しようという従来の発言も、この中で何らなされなかった。ヒットラーのソビエト接近は、このような形でその姿を浮かび上がらせようとする。存在した独ソ経済協定は、これに先立ち、一九三八年末に期限が切れることとなっていた。ナチスの努力は、既にこの関係の更新に向けられていた。駐ソ独大使シュレーンブルグ(Schulenburg)は、人民会議議長のモロトフ(Vyacheslav Molotov)と会見する意向を官辺筋にもらし、これに関し一九三八年十二月二日、ソ通商局員と独経済問題担当官シュナール(Julius Schnurre)との長時間の協議が行われていた。翌一九三九年一月には、駐独ソ大使メレカロフ(Alexei Merekalov)から独外務省へ、独ソ新通商関係樹立への希望がソ連政府の願望として表明せられた。

スターリンの党大会演説

三月一〇日の第一八回ソ連共産党大会に於けるスターリンの演説にも、ドイツへの攻撃、批判のトーンは弱く、非難は専らデモクラシー体制と英国に向けられていた。デモクラシー外交は、今や集団安全保障というその世界政策への金科玉条を放擲し、非干渉政策と中立回帰へ努力している、とスターリンは嘲笑した。「資本主義諸国は、一九二九年以来の世界恐慌から漸くぬけ出そうとし乍ら、再び一九三七年のそれに落ちこんでいる。……この矛盾解決の為、彼等はドイツをしてオーストリア、ズデーテン地方をとらしめ、チェッコスロバキアを見殺しにして、その誓約を反

故にした。その上、新聞は声を大にしてロシア陸軍の弱さ、空軍の士気低下、ソ連邦の騷擾をあげつらい、ドイツを東にけしかけ、その獲物獲得の容易さをのべ、ボルシェビキと戦うことですべてがよくないと筆をそろえた⁽³⁾のである、と。

情勢下、独ソ両首長の言動が、かく表明され、または観取されることとなつて、当然両国接近が、大きな問題とならねばならなかつた。スターリンはスピーチを平和と全世界通商関係の確保、ソ連が戦争屋諸国の口車にのつて、火中の栗をひろう愚にはおちいらぬということとしめくり、これは明白にそれが、英仏陣營の先兵としてドイツと戦うことは無いという意思の表明と受取られた。五月三日、リトビノフ外相が一九三〇年以来占めつづけた外相の地位を、モロトフにとつてかわられた。モロトフは、所謂スターリン子飼いの彼の人脈であり、ジノビエフ、カーメネフ、キーロフ、ブハーリンといったソビエト第一期人材の絶えた後をつぐ者として囑望せられていた。そして、彼は前任者と異なり、非ジュイフであつた。五月一七日、俄然、二月までつづいていた独ソ経済交流の話し合いが、再開される様相となつた。ソビエト代理大使 (chargé d'affaires) アンスタコフ (Georgi Astakov) が、シュナールを外務省に訪い、独ソ関係改善とソ連が英国の要求に従つて、反独行動に出ることは無いといった話し合いが行われ、二〇日には、独大使シュレーンブルグが、モロトフ新外相と長い時間、談合を行った。しかし、具体的成果は出なかつた。しかし、新外相は終始にこやかで友好的であつたと伝えられた。五月二〇日をすぎ、英ソ両国接近の報がベルリンにとどきはじめる。事実、英ソ両国の交渉が日程にのぼっている。モロトフは五月末日、外相としてのソビエト最高会議 (The Supreme Council of the U. S. S. R.) で英仏問題に⁽⁴⁾ぎのべたあと、ドイツ問題に言及した。英ソ両国の接近は、ロシアが、独伊両国との実地的基礎にたつ経済交流を無しで済ますことを考えているということでは決

して無い、と。これを聞いてシュレーンブルグは、モロトフはドイツに対する突出攻撃を避け、ベルリンとモスクワで始まった交渉を継続さす意思である、とヒットラーに報告する。

(1) Histoire des Relations internationales, Pierre Renouvin, de 1929 à 1945, Hachette, pp. 172-73. 一九三九年三月二日、英内閣は、与論の承認の下に「保障宣言」網にソ連の加わることを熟慮し、ソ連政府への打診で、前向きな解答を得ていた。英仏両政府は「外交システム」にこの時、ソ連を加えることが最重要な課題であるとするので、意見一致していた。ソ連はこの時、ポーランドのことを慮っていた。しかし、結局そのことは無く、保障はポーランド以下の東方国家に与えられたにとどまった。ポーランドは、この英国の行為が、ドイツに対独包囲網の形成といういらざる懸念を引起すという理由で、ソ連引込みの英国案に反対したが、この結果の生じた原因であった。ポーランドは、ソ連の赤軍が領通過要求に絶対応じられないという原則が、そのソ連への歩み寄りを妨げていた。「フランス人として、貴下はドイツにアルガス・ロレーヌをまかすことを承服出来ませうか」と駐バリ・ポ大使は言っていた。

(2) The Grand Failure, the Birth and Death of Communism in the Twentieth Century, Zbigniew Brzezinski, Macmillan, 1989, pp. 6-8. 後にヒットラー・ナチス・ドイツとスターリン・ソビエト・ロシアの間で戦われた激烈な戦争は、その凄惨さの故に、それが共通の信念の二つの約の間で戦われた兄弟殺戦争であることを、多くの人々に忘れさせている。たしかに一方は、マルキシズムに絶対反対を宣言し、前例なき民族的憎悪を唱導する。そして他方は、先例なき階級的憎悪を説くことに於て、マルキシズムの唯一真正の継承者であると主張する。しかし、双方共に国家を集団行動の最高の機関としたこと、野蛮なテロを社会的服従を強いる為の手段としたこと、歴史に前例なき大量殺戮を敢えてしたこと等に於て共通している。彼等はまた、相共に中央集権化され、完全検閲制となった大衆報道に青年団から隣人組織までを従わせて社会統制の手段とした。そして最後に彼等は、強力「社会主義」国家の建設に従事していると主張している。

ここで、ヒットラーがレーニンとムッソリーニの双方によって創始された政治的実践のどんな生徒であったことを記しておくのは、主題に関連して適切である。これら二人の人物は、彼の先達であった。特に、新しく目覚めた大衆を活性化させ、動員するのに新しい報道の手段を採用したことに於て。……一は、階級闘争を基礎とし、他は人種の優越を基礎とするが、ヒ

ットラーは権力を掌握することと社会を変革する為に、究極の戦略的勝利を目指すレーニン主義の軍事化された前衛党というボルシェヴィキの観念の注意深い生徒であった。

(3) Soviet Documents on Foreign Policy, 1933-41, vol. III, sel. & ed. by Jane Degras, Octagon, 1978, pp. 315-22.

(4) La Faille de la Paix, de l'Affaire Ériopienne à la Guerre (1936-1939), Maurice Baumont, Presses Universitaires de France, 1968, p. 866. 五月三日、英国人を妻とし、「全くヨーロッパ的」と称されていたロシヤ・シュエيوفのリトビンフが、一九三〇年以来占めていたソ連外相の地位を追われた。この罷免は、ヒットラーとその側近を喜ばず。五月六日、リップペンロップは、チアノに「ロシアの『反全体主義国家』ブロックへの加入を妨げねばならない」と宣言する。シュエيوف・リトビンフは「アーリアン」モロトフに代えられた。スターリンの親密な友人であり、直接的協力者であると考えられる後者は、最近までファシスト国家群に対抗するデモクラシー国家戦線の欠如をなげいていた。同様に彼は、ソ連邦は今や完璧な侵略者に直面している、と宣言する。

(5) Soviet Documents, vol. III, op. cit., pp. 332-40. 今日、侵略国は彼等の達成した結果を誇っており、デモクラシー国家群は、集団安全保障政策に背を向け、侵略に対する無抵抗主義を貫こうとしている。侵略に不拘、世界の現状は維持されている、とうそぶいている。ソ連邦の態度は、これらと全く異なり、侵略に断固反対する。英仏は、ミュンヘン協定はすこしの犠牲で、戦争の破裂を防いだとしている。三月、チエッコスロバキアは、地上から消滅し、ここを以て無抵抗主義は破綻した。侵略者はその態度を変えない。メメル、アルバニアが新しい被害地、被害国となった。四月末、英独海軍協定と独ボ不可侵協定が、ドイツ国頭首によって破棄された。この態度が、またルーズベルト大統領の平和提案に対する答えでもあった。最近、独伊二国は新しい協調関係に入り、侵略を相互援助すると決定した。彼等は共産主義、コミンテルンに対抗することのみを主張してきた。その態度は変化し、対向の予先は明確にデモクラシー諸国に擬せられている。果して、彼等は、無抵抗主義を放棄するや否や。ソ連は断固たる態度をとるが、同志スターリンの言う如く、我国はすべて慎重でなければならぬ、戦争屋の為に火中の栗をひらう愚は、断然これを避けなければならない。英国にこの方向への変化が認められ、英ボ相互援助協定締結の動きが出ている。英トルコ間にもその動きがある。現在彼等は、ソ連邦を自己陣営に引き入れようと考へ出した。これは考慮に値する。ソ連政府はこの協調と平和維持の為、彼等の交渉提案に応じた。交渉は、四月中旬に始まり、まだ終わっていない。そのめざすところは、英仏ソ三国間の防衛相互援助協定、中東欧、ソ連隣接諸国への保障、これに関する実際手段と範囲の決

定である。これは防衛的なものであり、独伊の協定とは根本的に異なる。義務は相互的であり、平等である。ここに問題がある。ソ連は援助を与えるとして、それは侵略の直接の目的とされたとき、それは彼等の援助を真実期待出来るかということと、英仏のあげる五カ国はよいとして、ソ連邦北西部三国に対する保障はどうかということである。後者三国については、いまだ何等の言及がないということである。これが疑問であり、当然、ソ連邦はこの三国への保障なければ、さきの五カ国への保障には賛成し兼ねるのである。英仏との談合の如何に不拘、我々は独伊との経済交渉を放擲しない。独側は、二億マルクのクレジット設定を申入れ、シュナール、シュレーンブルクとの交渉が続けられた。それは条件上一旦打切られたが、その再開は、今や可能である。イタリヤとの一九三九年をめざす通商協定は調印された。ポーランドとの隣人声明、通商協定の三月妥結は好ましく、トルコとの友好も発展し、ボチユムキン (Vladimir Potienkine) 同志のアンカラ訪問は、重要な意義をもった。アーランド諸島問題は、ソ連邦にとって重大である。ボルシェビキ革命に際し、それらはフィンランドの独立と共に該国に帰属させられた(一九一七年二月二九日、筆者註)。一九二二年、フィンランド、エストニア、ラトビア、ポーランド、スエーデン、デンマーク、独英仏伊一〇カ国は、アーランド諸島非武装の決定を行った。ソ連は排除された。戦後、革命疲弊のソ連は、これに抗議するだけであった。抗議は繰返された。アーランド諸島の法的変化は、如何なるものもソ連利害の重大な侵犯である、と。該諸島の武装化は、ソ連湾口の閉鎖となる。しかるにフィンランド政府は、最近スエーデンを誘ってこれを武装化しようとしている。これに対するソ連の照会には、軍事機密といつて答えない。スエーデンは、本来一九二一年協約下、これに関する何らの権利関係は無い。この問題は、連盟理事会でとりあげられた。一九二一年協約は同年六月二四日、該理事会決定にかかるものだからである。ソ連代表部の抗議によって、理事会は必要とされる全会一致が得られなかった。フィンランドは事態を理解すべきである。ソ連は、この問題を我々の重大利害関係として絶対無視し得ない。日本とは漁業権問題がある。日本は、沿海州 (Maritime Province)、オホーツク海、樺太、カムチャッカに於て漁業に従事しており、現在、漁場は三八四を数える。しかし、その貸借関係は期限が来ている。その多数について、ソ連は戦略的見地から更新し得ない。日本、特に反動分子はこれに強力に反対している。①三七漁場の閉鎖、②一〇新漁場の他地域開設、③当該漁業協定の一年間有効延長。日本は脅威するが、それでは問題解決にならないことを、今回の交渉で悟らねばならない。日満軍によるソビエト、モンゴル国境侵犯は、眼にあまる。我国は、蒙古人民共和国と相互援助条約を結んでおり、蒙古国境侵犯には、直ちに適当な対応をする。侵犯はやめらるべきであり、このことについて、モスコウ駐在日本大使に警告した。ソ連邦は、侵略に抗し、独

立保持に闘う国を全力で援助する。これは中国に全的に適用される。このソ連の行動は、欧州に於けると同様である。侵略に抗する平和戦線の結成が、ソ連邦の不変の目標である。

モロトフの演説は、重大であった。特にソ連と英仏の意思の疎隔が、英仏のバルト三国に対する独立保障の無視に帰されていることは、そうである。この事實は、英仏側の文献資料には見出されない。果して真か、偽か。しかし、ソ英仏三国合意が、漠然としたゆき違いと、ソ独両国の大胆な結びつきが、英仏両国の鼻をあかしたと、更に尚、ポーランドのかたくなソ連拒否から生じたとする西欧側の解釈は、その点とにかく空漠としてとりとめないものであって、バルト三国をめぐる英ソ両国の綱引きが、英仏ソ会談の不成功の真因であるとする説明の方が、具体性をもったそれといえることはたしかにある。この時のモロトフ演説は、重大なソ連外交の真意表明でもあるので、直接独ソ会談に関係ないものもとりあげた。

四 英仏独ソ四国と相互援助・不可侵協定

スターリン外交

ソ連邦は、英仏陣営と独伊陣営を天秤にかけ、一大決心の下に構築した英国のヒットラー封じ込め作戦を嘲笑する。スターリンの腹は、最初から固まっていたと考えるのが自然である。即ち、このときソ連が英仏両国と結合すれば、ヒットラーは孤立し、頽勢を既倒に転回する由なきままに、また今更後退も不可能なままに、英仏陣営に断然突撃し、これは旬日ならずして独ソ戦をも結果するであろう。これでは、スターリンのまたマルクス共産主義の原則的主張に反する。資本主義諸国家は、彼等によれば相互に敵対、対立させ、相争わさせねばならないからである。ここはソ連としては、ドイツと手を握り、ドイツが余裕を以てチェムバレン包囲網を切り破る外交的支援を与えねばならない。ドイツにしても事情は同断である。のしかかってきた英仏両国の羽交いじめを切り破る為には、ソ連の中立は絶対必要である。かくして独ソ両国は、互いに求めあった。これ、犬猿の仲もただならぬ独ソ両国が、英仏両国のヒットラ

一 包囲作戦に逢着し、従来の立場と考えを一変させて、両国結合に踏切る重大、最大の理由であった。ソ連はこの時、この事情の下では、戦争必至を念頭にして、この挙に出る以外はなかったろう。⁽¹⁾ 英仏両国とソ連の三国援助条約交渉が、独ソ不侵略協定締結交渉と平行するのは、全く外交的ゼスチュアと、独ソ交渉をドイツに高く売りつける為の手段にすぎなかった。チェムバレンは、あわれ、ここでもスターリン外交にいいところなく翻弄され、一敗地にまみれる。いうなれば、彼はスターリンの術策にはまった形となって英ソ交渉の場に引き出され、スターリンによって独ソ交渉の道具と利用される謂だからである。思うなれば、この事態でソ連と共産主義の理論よりすれば、前述の如く、英仏ソ結合は考えられず、またあり得ない。この意味よりして独ソ結合はまことに既定の事実であったと喝破してさへ可なりであろう。これ左翼独裁のスターリン外交と議会の議論を経過しなければならぬデモクラシー外交のその意味での直截性と迂遠さの相異でもあろうか。しかし、この直截果断のスターリン外交は、のち思わぬヒットラーの裏切りにあつて、いとも簡単に不可侵条約を破られ、独軍のソ連侵攻を迎え（一九四一年六月二三日から）、塗炭の苦しみを余儀なくされる。まさに神のみぞ知る世の中の有為転変の激烈さであった。スターリン是か、チェムバレン是か、これ何人か裁断し得ん。そこにはただ、ヒットラー暴発ファッシンスト外交に翻弄された二人の姿があり、欧州の歴史があるのみである。⁽²⁾ しかし、この結果、失われた人命と資材、国帑の夥しさに果して何びとが静思、涙し得るのであろうか。

ドイツと英国

五月半ばを過ぎ、英国では独ソ接近が重大な段階に差しかかったという認識が広がる。外務省では、対独包囲策戦がソ連の中立堅持によって脅かされ、最悪の場合、それが破られるかも知れぬという不安を持つ。何とならば、効果

的な東部戦線の構築なくして西欧の防衛は成り立たず、ロシアを欠いて有効な東部戦線の構築は問題とならぬからであつた。二七日、N・チェムバレンは駐モスコウ英大使に、ロシア側との接触を具体化するよう指令した。しかし、首相はロシア接近に依然微温的であつた。⁽³⁾一方、ヒットラーは国防軍の将軍を集めて、「策戦・白」をなおつめる指令を出した。勿論、それはポーランド攻撃を骨子とするものであつたが、関心は専ら英国に向けられ、それとの戦いが云々された。ソ連については、これをポーランドから引離すことは、望み得ないことではないとされたが、それと英仏との結合は、最も危険で、その場合は第一次世界大戦の如く、ドイツは強力な破壊力をもって英国に戦いを挑まねばならず、再びウイヘルム二世の愚を繰返すこととなると分析された。この線に副つた独ソ交渉が考究され、ヒットラーの意図が、リッベントロップからシュレーンブルグ大使に示され、この時は、早い機会に大使とモロトフ外相との会見をセツトするように示唆された。モロトフへの勧説として、次の事項が示された。①独ソ間には利害の対立はない。今や両国関係正常化のときである。②独伊同盟はソ連に対決するものではなく、目標は英仏両国同盟である。③不幸、ポーランドと干戈を交えるとき来るとも、独ソ利害の衝突が起る様なことは絶無である。その際もドイツはソ連の利害を最優先に考える。英国についての考慮は、ヒットラーの心を常に悩ましつづける。この際は当然、依然、英ソ結合への懸念である。しかし、英国はロシアに与えられるものはない筈である、と彼は結論する。英国はロシアに火中の栗を拾わずだけであろう……。シュレーンブルグ大使も同様の線でモロトフとの接触が必要となる。⁽⁴⁾この線でドイツのソ連接近がつつ走るかと思われたが、ここで一応ヒットラーはブレーキをかける。急迫的対ソ接近から慎重、遠慮なそれへの転換、それは①英ソ会談が成熟し、予断を許さなくなつてきたこと。②日伊両国がドイツの対ソ接近に不快を感じていること。そして③ムッソリーニが、戦争準備に尙両三年の日子を必要とし、一九四

三年からの開戦を熱望している（五月三〇日、極秘書簡で自らヒットラーに開陳）こと等への考慮からであった。こうしてしばらくは、通商協定に関する談話が続けられる見通しとなった。

(1) *Histoire de La Diplomatie, Vladimir Potienkine, Tome III, 1919-1939, op. cit., p. 711.* 独ソ不可侵条約締結に関するスターリンの述懐は、次の如く示されている。これは、一九四一年七月三日の有名なラジオ放送を通じてのものである。ヒットラーは六月二日、ソ連邦に侵犯していた。「何うして、ヒットラーやリッペントロップのような裏切りの鬼のような者達と不可侵条約を締結することとしたのか、という問いかけは、当然なされるであろう。それはソ連政府によって犯された失敗ではなかったのか、と。しかし、それは断固、ノーである。不可侵条約は、二国家間の平和協定である。それは一九三九年にドイツが我々に要請したものである。この平和の提案をソ連邦としてどうして拒絶し得るか。唯一の平和愛好国である我が国が、ヒットラーやリッペントロップのような人喰いの怪物に統治されているとはいえ、近隣国との平和協定を拒否し得るとは、考えられない。しかもこの平和協定の条件は、明白に平和な国家の領土の一体、独立、そして名譽を直接、間接に侵害しないものである。そしてまさに、ドイツとソ連邦との間に締結せられた不可侵条約は、このようなものである。

この不可侵協定をドイツとの間に締結することで、我々ほどのようなものを獲得出来たか。一年半の平和を確保し、いまだドイツが、条約あるに不拘、実行している如き侵略の場合、これに立向える我々の軍備を準備することが出来た。これこそ我々にとっての確実な利益であり、ファッシスト・ドイツにとっての大きな損失である。

(2) *histoire diplomatique de 1919 à nos jours, Jean-Baptiste Duroselle, 10e édition, Dalloz, 1990, pp. 244-45.* ダンチックに關する戦争の見通しは、ソ連邦との共同を特に重大な懸案とした。西欧デモクラシー国とヒットラー・ドイツが、夫々の陣営にソ連をとりこもうとしたことは、驚くに当たらない。しかし、八月までは、ソ連の選択は疑いもなく、決断されていなかった。かくして二面同時交渉が結果する（こういう意見もある一筆者註）。ソ連邦は民主主義国が彼等の保障を与えたポーランド、ルーマニアという国によって、ドイツから隔てられている。この為、ドイツに対する直接的同盟の必要を持たない。イデオロギー的プランからも、それは自由主義的民主主義、ヒットラー・イデオロギー、ベックのポーランドのそれ等と何らの関連もない。従って、それは自己の利益を最大限に考へての解決に向って行動出来る。モスコウに於ける一九三九年三月一

一日のスピーチで、マヌイルスキ(Manovitsky)は言う。「英国反動ブルジョア政府は、南東ヨーロッパ諸小国をフアッソズム・ドイツの犠牲とする心算である。ソ連邦の共産主義の勝利と社会主義の前進を押しとどめる為、反革命戦争という手段で、ドイツを東にけしかける目的で」と。この時点では、ソ連は東方集團安全(東方ロカール)策に固執していた。そこで、ソ連は寧ろ民主勢力の側に向かう様相であった。三月一九日、プラーグの占領で、ドイツに抗議を発したソ連は、英国との意見交換で、英仏土ポーランド、ルーマニア間の情勢検討の為の会議を提案した。しかし、英国政府は英仏ソ、ポーランドの四国共同宣言の発出を逆提案した。そして、これらどちらもが実現しない。ソ連と英仏両国の関係は、常時、このような具合であった。

- (c) The Great Powers and Poland, 1919-1945, Jan Karski, Univ. Press of America, Inc., 1985, pp. 329-36. 仏ボ戦時協力会議は、一九三九年五月にパリで開かれた。ワルソー側は、陸相 Gen. T. Kasprzycki、陸軍参謀次長 Col. J. Jaklicz、空軍次官、海軍次官、陸海空アタッシェ等が参加し、仏側は、最高司令官指名の Gen. Maurice Gamelin、陸軍司令官 Gen. A. Georges、空軍参謀長 Gen. J. Vuillemin、海軍参謀長・海軍中将 J. Darlan と他の四名の高級士官であった。会談は、はかばかしくなかつた。ガムランが、ドイツ、ポーランド攻撃の場合、直接全面的ポーランド支援に否であった為である。彼は仏ソ軍事協定の先行を望んでいた。彼はポーランドの軍事を疑っており、またソ連の協力を欠いては、西欧の対ボ援助は効果的と考えていなかった。五月一九日、軍事協約が調印された。①ドイツのポーランド攻撃の場合、またはダンチツヒのポーランド重大利益脅威の場合、仏空軍は活動を開始する。②陸軍は動員三日後、限定的攻撃を開始する。③動員一五日後、ドイツの対ボ直接攻撃の場合、仏軍は大部隊を投入しはじめる。④戦争初期、ボ軍は防衛戦のみを戦う。⑤ドイツの仏攻撃の場合、ボ軍は可能な限り独軍部隊を引受けることを試みる。五月二七日には、仏空軍のドイツ攻撃プランをきめる空軍協約も署名された。しかし、この軍事協約は政治協定の締結を条件とすることとされてしまう。その政治会議は、一九二一年の仏ボ軍事協定を一九三九年三月～四月の英仏保障政策と合体さす為のものとした。一九二一年協約は、仏の対ボ援助を戦争必需品と技術の送達のみとしていたことは、有名である。就中、ここで重要なことは、ポーランドがドイツによるダンチツヒ併合を条約該当事由(casus foederis)とすることを求めたのに、ボネが拒否したことであった。彼は、フランスはポーランドに対する如何なる義務も引受けるべきでなく、それは英国をもしはるようになるからという意見であった。ハリファックス英外相は、英外務省としては一切の情況下、ダンチツヒの防衛を義務的とは考えないというものであった。こうしてこの政治協定が締結

されるのは、九月四日、フランス参戦の一日後ということになってしまふのであった。

英ポ軍事会談は、同じく五月と七月に開催された。五月二三―三〇日の参加者、英側、英参謀部 Brig. Gen. P. Clayton、海軍大尉 Rawlings、空軍大佐 Davidson、ポーランド側、陸軍参謀長 Gen. W. Stachiewicz、海軍中将 J. Swirski、空軍参謀長 Gen. S. Ujejski、J. Jaklicz 大佐。この顔ぶれでも英国側の会談に対する微温的態度が、わかるように思える。そして、七月からの第二回会談に英国帝国総参謀長 Sir E. Ironside が加わった。しかし、それは九月、即ち戦争がはじまって後のこととなった。彼はワルソーに飛び、司令長官指命のシエムグリー・リッツ元帥 (Marshal Smigly-Rydz) と詳細な会談を行った。これにベックと英国大使館代表 Clifford Norton が加わった。この会談でアイアンサイドは、ポーランド援助につき、英国空軍が直ちに行動を開始するとのべた。ポーランドの非軍事施設の爆撃の場合、英国はナチ空軍の英本国に対する動きにかかわらず、同様の行動に出る、と声明した。しかし、彼は海軍はシー・ルートの防衛に専念する、とのべ、陸軍の発動はなく、またその行動は期待せられ得ない、と宣言した。空軍については、百爆撃機を送ると約束し、ハリケーンも多数含まれるとのべた。ここに英国のポーランド安全・独立保障が、この期に及んでも決して大向うから喝采をあげる体のもものでは、どうもなさそうであった。チャーチル (W. Churchill) は、八月半ば、仏戦線を視察し、デオルジュ大將と談合した際、その印象として、仏軍が大規模攻撃をかける気配はなく、攻撃された場合、彼等自身を防護する意向をのみ有していて、とにかく戦争がはじまっても、緒戦段階では何らのイニシヤチブをとる気はないようである、と喝破していた。また、アルメンガウ大將 (Gen. Armeingaud) は、仏ポ空軍協定につき、プランそのものも、その義務も現実性のないものだと言明した。彼は、上長がフランスのポーランド援助は、陸空何れにして、直接、間接に矢張り、現実性なきことを認識している、とした。フランスは、ポーランド人がそう思わないように欲している、としたが、實際上、フランスはポーランドがドイツの強攻を真向から受け、その間にフランスは防衛動員とフランス防護に専念出来る時を稼ぐ心算だと確信するに至った。

(4) Documents of German History, Louis L. Snyder, Editor, Rutgers Univ. Press, pp. 445-46. Extracts from the Minutes of a secret Conference of Hitler and the German Army Chiefs, May 23, 1939. (これは R. Schmundt 中佐の速記録、ニューレンベルグ軍事法廷に提出されたもの)……総統は、英国との平和的妥結に懐疑的である。英国に対し、闘争に備えなければならぬ。英国は我々の発展に覇権の確立を恐れている。英国が敵になれば、それは我々にとっての生死の戦いとなるであろう。英国はドイツと妥協せず、戦いの場合、ルール盆地に近く戦闘を展開しようとする。フランス人も流血を免れさせる

ことは出来ない。ルールの保持こそ、我々の抵抗の期間を決定するだろう。オランダ、ベルギーの中立は顧慮しない。英仏がポーランド戦争で戦争にまきこまれば、和両両国の中立を尊重するとし、防壁を構築させ、はては彼等を協同させるに違いない。和両両国の抗議は通じないだろう。もし、英国がポーランド戦争に介入すれば、我々は軽快なスピードでオランダを占領しなければならぬ。そこに新しい防衛線をズイダー・ジーマで確保しなければならぬ。英国の力は、次の諸点にある。

①性質、誇り高く、勇氣、粘り強く、堅固。抵抗は根強く、生來組織力に富む。北歐種族の冒険性と勇猛をもつ。これは擾乱によつて低下される。ドイツの平均は、彼等より高い。②世界国家性、三百年の伝統と同盟策。しかし、これは具体的堅固なものではない。心理的世界観である。この不可測の富に傲慢な信用がつけ加えられる。③地政学的安全と人力と勇敢な空軍による防壁。英国の弱点。もし第一大戦で我々が、もう二隻の戦艦ともう二隻の巡洋艦をもっており、ジュットランド沖海戦が朝からはじまっていたのなら、英海軍は破れ、我々に膝を屈していたのだ。最後英国への上陸が敢行されなければならなかった。英国は、自己自身の食糧供給が出来たのだった。しかし、今日、それはもうそうではない。食糧をたてば、それは崩壊する。食糧とオイルの輸入は、海軍の防衛力によつてゐる。独空軍の攻撃では、英国を一日で崩壊させ得ない。しかし、海軍を潰滅に導けば、その降伏が結果する。④敵に決定的一撃を与える努力がなされねばならぬ。正、悪条約等の顧慮は不必要。これらは我々が、ポーランドのことで、戦争にまき込まれない際にのみ考えればよい。⑤奇襲と共に長期戦の準備と英国にとつての大陸での機会を消滅させる為のそれも考えられねばならない。陸軍は、海軍と空軍の為に地歩を確保する必要がある。和両両国の占領とフランスの崩壊が対英戦争の結果を成功的となし得る。英国は、空軍によつて西仏の近接地点から封鎖出来、海軍は潜水艦と共にこの封鎖の範囲を広げることが出来る。ヒットラーはこのように秘密会談で、対英戦を具体的に説明して見せた。しかし、それは軍への扇動的言辭も多分に含まれていて、根本的に大英帝国にたち向う内心のおそれが、具体的国力と戦力の分析がどれ程なされてゐるようである。そう感じるのは、筆者のひがめであるうか。英国の政経軍事に関する資料の收拾や分析がどれ程なされてゐるのか、は大きなまたナチ政戦略にとつての致命的疑問でなければならぬ。ヒットラーは敵を知ること甚だ吝であったと言わねばならないのではないか。

五 独ソ不可侵協定の締結へ

ポーランド分割への言及

しかし、ヒットラーは静止していなかった。五月三十一日、突如、デンマークに対し、安全保障として相互不可侵協定を与えたが、六月七日に至り、ラトビア、エストニアとも相互不可侵協定を締結した。これは英仏のポーランド、ルーマニア、ギリシアに対する安全保障協定への対抗の意味合いを持つが、この時、英仏ソ三国間に前二者に対する安全保障協定を与えんとする試みが顕然化したことが、ヒットラーをして急遽この挙に出さしめた最大原因と考えられる。

かくして、ドイツよりこの線上にそった独ソ不可侵協定の締結が提案される。即ち、六月二八日、シュレーンブルグ大使よりモロトフ外相に対し、この提案がなされたのである。こうして世界史上希有の重大さを持つ——第二次欧州大戦の破裂を導いた——一つの協定がはじめて提案されることとなった。この協定の重大さと危険性は、よく筆舌のつくし得るところではない。ファッシズム外交——共産党独裁政権とナチズム——のみが突然、断然の試みとしてなし得る、これは極限のそれである。

この最初の提案に対しては、ソ連側モロトフの対応は、ドイツとの関係正常化を望むが、かかる条約の永続性は、ポーランドの例よりも疑わしい、として拒否的であった。ここではヒットラーは再び対ソ接近に冷やかとなり、独交渉関係者に慎重策にかえるよう指令する。六月二九日のことであった。表面上の理由は、ソ連の通商交渉における頑固さ、特に一月、二月のソ連提案の受け入れ難さに求められた。しかし事實は、ソ連側は既に妥協的態度に出て

いたのであった。七月一八日ソ連使節がシュナーレを訪い、通商条約の締結をさへ示唆した。こうして独ソ通商交渉は、二二日順調に再開された。ここに独ソ交渉の見通しにゆれるヒットラーとドイツの姿がある。二六日、独外相の指令に基づき、シュナーレ博士はアシュタコフとベルリンの洒落たレストランで晚餐を共にし、後者は今や独ソ間にはバルチックから黒海、極東に至る間何の障害もない、と確言した。独伊ソ三国は、反資本主義デモクラシーの点で完全に一致している、とものべた。独ソ両国は急速に接近し、この時点で、英仏の対ソ軍事会談、政治会談の雰囲気の中で、リッベントロップ外相はシュレーンブルグ大使に、ソ連への打診としてポーランドの運命（メーデー）に関し、独ソ諒解を求めたい旨示唆した。この極秘至急電は、八月三日の日付であり、ここにポーランドの名が、はじめて独ソ交渉のテーマの中に顔を出した。しかし、このことはやく五月七日、駐独仏大使クロンドル（R. Coulondre）から仏外相ボネ（Georges Bonnet）に対する報告の中にとりあげられていた。大使はヒットラー側近の極秘情報として、総統がポーランド分割に関し、ソ連当局と諒解をとげたい意向である、とのべている。同九日、ベルリンでは早くもポーランド分割の噂が流れているとのべていたのであった。^{（一）}

リッベントロップの指令

八月三日深更、シュレーンブルグはモスコウでモロトフ外相と会談したが、外相はドイツの対ソ態度につき、これを歴史的に非難するところがあった。その主題は、防共協定、独・日本の反ソ政策支援、ミュンヘン協定からのソ連の疎外であった。独大使は、これに幻惑されたのか、ソ連は英仏との協調をより望んでいる、とベルリンに書き送る始末であった。ベルリンの確信は、ソ連中立をかちとれば、独ポ戦争に英仏はたたず、もしたつとしてもポーランド崩壊後、全軍を西方に転回して速やかに英仏両国を撃滅し得るとしていた。

このドイツの動きに枢軸は、反対であった。ハンガリーは、七月二四日、首相テレキ(Count Teleki)が、ハンガリーの対ロシア不戦を表明し、これはハンガリーの道德的基礎であると言ひ、またイタリアでは、チアノ外相がザルツブルグ、オーベルザルツベルグを訪れて(八月一日〜二三日)、リッベントロップ、ヒットラーと夫々会談し、イタリアの不戦態度と欧州列強間の平和会議開催を訴えた。前者については、ヒットラーは常套手段である脅迫をもつて、首相声明を撤回させ、後者についてはこれを無視、イタリアのドイツ従属をかえつて強化する方向をとつた。⁽²⁾

八月一二日、英仏使節団がモスコウを訪れた。この日、ソ連側からの電報が、ソ独会談をモスコウで開きたいと要請してきた。しかし、この電文の存在は、その後独資料の中には発見されないという。しかし、同日、アシユタコフがシュナールをベルリンに訪問し、モロトフが会談の用意ありとつげた。その中にポーランド問題の討議もはじめとりあげられていた。一四日、リッベントロップからシュレーンベルグに独ソ交渉に向ひ、モロトフを訪問するよう指令がとんだ。モロトフは、交渉の漸進をのべていたが、独側はヒットラーの九月一日期限(ポーランド攻撃)をあくまで遵守したい意向であった。リッベントロップは独大使に、モロトフ以上にスターリンと直接会談して、独側の意向を誤りなく彼に伝えるよう、出来るだけとりはからうことを指示した。その意向の中には、バルチック諸国、ポーランド、東欧領土問題が含まれる。ここに英仏両国の絶対容認出来ない主題、ポーランドの独ソ分割が浮かび出てくるのである。

(1) Le Livre jaune français, Documents diplomatiques, 1938-39, Ministère des Affaires Étrangères, 1939, No. 132, M. Coullondre, Ambassadeur de France à Berlin, à Georges Bonnet, Ministre des Affaires Étrangères, Berlin, le 1er juin 1939, pp. 180-81. 三つの可能性が考えられる。ポーランドの後退、戦争、ドイツの後退。①第一の解決として、これらの選

扱が期待され、今後ともさがし求められるとしている。この為、ポーランドは動員状態をつづけ、神経戦と資源をつくす危機状況がつづく。しかし、今後二カ月が山となる。確かな情報。ドイツの各外交ポストは、ダンテヒを原因として英仏はたたない、というニュースを流すよう指令された。ベルリンの各国外交団に対してもこのキャンペーンがなされている。確かな情報。ヒットラーは、しかし状況を決して見誤っていない。彼は、一旦緩急の場合、英仏両国はポーランドの側でたつ、という情報を各独外交使節から得ている。②もしダンテヒを原因として戦争が起っても、それは全面戦争となる、という見通しがあった。総統は、参謀長カイテル大将(W. Keitel)と陸軍司令長官プロキッチュ大将(W. Brauchitsch)に現情下の全面戦争は、ドイツにとって如何なる利益となるかをたずねた。兩名は、ロシアが争いを限定するか、或は争いの外に立つことはないかにつき考え、第一の場合、カイテル大将は「イエス」と答え、プロキッチュ(見解はもっと価値がある)は、「多分」と答えた。二人はドイツがロシアと戦わなければならない場合、後者の勝利の機会はほとんどない、と確言した。両将は、トルコの介入に重要さを認め、しかしそれは、ロシアが行動しない限り、西欧諸国の為になることはないとした。独外務省(Wilhelmstrasse)の意見は、ポーランドが譲歩しない限り、ヒットラーの決定は英露協定の成否にかかっている、というものであった。彼は、ロシアと戦うことがないなら戦争を賭するだろう。しかし、反対に彼がその国と戦わなければならないとしたら、彼は国、党、そして彼自身を破滅に向う危険(leur perte)にさらすことはしないだろう、と考えられている。英露会談が長引くならば、近々の週内にダンテヒへの急襲(coup de main)の危険性が考えられないことはない。③独外務省では、総統の心では、ダンテヒは目的ではなく手段と考えられている、ということである。現在までの報告にも示した如く、英露会談の重要性は、この時期、何にもまして緊急である。その即刻の締結が必要である。私の閣下に送ったこれまでの報告が、種々示唆する如く、危いのは八月と考えられ、それは特に危険な時期と思われるが、それは進行中の裏取引の結末が出るまで続く如くみえる。同僚である英国大使も、これら情報を厳しく受けとめている。彼はこれらを同様、ロンドンに伝達し、英仏露協定の締結が最良の選択として急がれることを主張した、ということであった。私は、彼に、我々としては、この結果が、可能な限り、遅滞なく獲得出来るように如何なる努力も惜しんではならない、と言っていたのである。このクロンドルの報告は、独ソ会談の進捗状況を伝える極めて信憑性の高いそれとして、常に引用される。独ソ会談の内容は、当時、秘中の秘であり、何人も軽々に窺知することを許されなかった。これについては、従って明瞭に確言することは出来なかつたようである。こゝに *the indications, tracations* 等の語が、従つて使われ *je ne s'en est aperçu*。ibid., No. 135, M. Coulondre, Ambassadeur de

France à Berlin, à M. Georges Bonnet, Ministre des Affaires Étrangères, Berlin, le 13 juin 1939. この報告でクレンデルは、リップントロップにとってダンテッチ問題は、今やポーランド問題をポーランド次第に考えている、と言いつ、この問題の解決につき三つの仮定を示す。一はチエッコスロバキアの状態の如く、英仏両国による調整、或はポーランド自身のそれ、或はロシアとのそれ。最初のもは、三月一五日以降の英仏両国の態度から不可能である。二つ目は、ポーランドの頑固さがその成就を妨げる。これは英国の保障によつてなお勇気づけられている。ドイツ・ポーランド交渉といわれるものは、技術的な点だけで原則の不一致は、残されたままである。残っているのは、第三の解決で、これは第三帝国とロシアの間にポーランドを解体して分割するというそれである。リップントロップは、この考えを未だ放棄していない。それは英露協約が調印されるまで、彼はそれを捨てない。ソビエトを籠絡しつづける為、この決心を持ちつづける。「コンドル」軍団の移転は、普通ならボルシェビズムに対する攻撃の為のものであった。リップントロップはそのスピーチの中で、決してロシアの感情を傷つけないように言葉に注意した。総統自身も「コンドル」軍団に演説した時、慣例に反して「ボルシェビズム」とか「共產主義」とかいう言葉を減多に使わなかった。彼が非難の矛先を向けたのは、「デモクラシー」であり、「戦争屋、戦争利得者」、そして「ドイツ包囲の技巧者達」に対してであった。ヒットラーのこのつつしみは、決して偶然ではない。彼は明らかに、ロシア人を再びとらえるという、或は少なくとも、彼等を英仏両国の保護の下につくられたブロックから遠ざけておきたい希望をあためていたリップントロップに影響されていたのであった。この報告によると、明確に独ソ両国によるポーランド分割というフランス革命時以来のポーランド分割（一七七二〜九五年、露普墺三国による）が、計画の粗上に乗っていたことが探り出されていたようである。しかし、それがどの程度の明確さをもっていたのかは分明でない。それはこの報告のリップントロップに関する臆測が、その範囲を出ていないようだからである。しかし、前便から二週間の後に、独ソ接近の様相が、とにかく大きな進捗を示していることだけは、この報告から明瞭に読みとれる。英仏両国政府が、この報告をどう取扱っていたかは、確たる反応を示す証拠もないようであるが、最も興味あるところである。これに関する報告は、六月七月の間、かえって駐ソ米大使からルーズベルト大統領に送られ、大統領から英仏両国政府に伝達されたという。また、大統領はスターリンに警告して、ナチスはロシアと同盟して西欧に向い、フランス征服に成功すれば、直ちに軍を反転してソ連に攻めこむ、と述べていたという。情報錯綜する現代外交界で、将来をあやまたず予見するそれをとりあげることは情報不足で、それが出来ない場合と同様、極めて困難なことなのであろうか。ibid., No. 125, M. Courtonne, Ambassadeur de France à Berlin, à M.

Georges Bonnet, *Ministre des Affaires Étrangères*, Berlin, le 9 mai 1939. しかし、早くもこの五月九日の極めて長文のクロンドルの報告の中に次の一節がある。リトビノフ (Maxim Litvinov) の退職に関し、ヒットラー陣営幹部は、「ドイツ包囲の国家網を打破するといっているところ、リトビノフの引退がモスコウと国家群の微妙な関係にいい影響を与えないであろうし、これをナチスが利用するであろう。予断を許さぬとし、とにかく二四時間前から一つの騒ぎが、首都ベルリンに広がっているが、それはドイツが、ポーランドの分割という提案をソビエト・ロシアになしたというか、もしくは近々それをなすという噂である、と言っている。この噂が、非常に力強いものがあつた為、ソビエト代理大使は、強くこれに印象づけられ、今夕、私と会つた時、このように尋ねた。「貴下は、ソビエト政府が政策の変更を決定したと感ずるか」と。そこで私は、このような質問は、私こそがするべきものだと思つたところ、彼は今まで、モスコウから流布されている噂を、どんな基礎の上にも置くように考えられる指令は一切受取つていない、と言つた。尚、彼は、彼の大使が四月一七日にワイゼッカーと会談した時、彼は政策問題は、何ら取上げられなかつたと代理大使に語つた、とつけ加えた。この噂は、後の経過を考えるとほんものであると思える。しかし、第三者の報告以外、これらに関する明瞭な具体的資料は全くない如くである。従つて、第三者が全くこれらを断固として確言出来ないのは、当然のことであつた。

(2) Ciano's Diary, 1939-1943, op. cit., pp. 90-93, May 20, 21, 24, 25 and 26, 1939. 五月二〇日からチアノは、ベルリンに赴き、所謂鋼鉄の協定をリッペントロップとの間で調印した。印象はあまりよくなく、ドイツ側がすべてをかくして軽侮しているということをおべている。五月一日前後からチアノの日記には、クロンドルの独ソ交渉に関する示唆に類するもの的一切はあらわれないのが興味深い。しかし、五月二四日、ローマに帰着したチアノにファシスト党は大歓迎であつたし、ムッソリーニは、彼に大きな満足を表明した。ただ国王からチアノへ侯爵号授与の打診は、ムッソリーニがファシスト党の怨嗟がきついという理由で、これは断わられたという。国王はジズネリーのひそみにならうつもりでもあつたらうか。 Mussolini, Anthony J. Joes, *Franklin Watts*, 1982, p. 330. Mussolini, Denis M. Smith, *Alfred A. Knopf*, 1982, pp. 232 & 237. *Italian Foreign Policy under Mussolini*, Luigi Villari, Devin-Adair 1956, pp. 242-43. ムッソリーニは、この同盟締結の後、五月末に至つてヒットラーに書簡を送り、戦争は一九四三年まで起らないことが望ましい、とのべたのであつた。これはムッソリーニは、すでに彼の意見としてひそかにのべていたところであつた。そして、これはその間に伊軍備が、もっと改良、増大されるだろうというのであつた。しかし、ポーランドについて、ムッソリーニは楽観的で、ポーランドは戦わ

ず屈服すると考えていた。しかし、万一ポーランド問題で全面戦争になっても、イタリアはドイツを助ける、と言っていた。チエッコスロバキア解体にムッソリーニがヒットラーを助けたように事態が進行するというのが、彼の主たる観念であった。そして、これは伊国民一般の願望であり、一九三九年九月一日以降も伊政府が戦争不介入を声明したことを喜んでいた。イタリアはポーランドの独ソ間分割に寧ろ大きなショックを受けた。(伊の英仏宣戦は一九四〇年六月一〇日)これは、イタリアがドイツの欧州覇権も、英仏のそれも共にきらった為とされる。しかし、ムッソリーニは兵力一五〇師団、うち若干は装甲部隊であり、その大部分は最新兵器によって武装されており、その背後に千二百万の予後備兵が控えていると豪語していたが、その実際は不十分な、しかも時代遅れの武装しかもたない一〇師団こそこの兵力があるだけという貧弱なものであり、空軍はまた旧式なものであったということから、伊全土に当然の避戦気分が広がっていたことが、政府、民間の戦争に対する消極的な反応の主たる原因であったとみななければならない。Ciano's Diary, op. cit., August 10-25, 1939. Mussolini unleashed, 1939-1941, Macgregor Knox, Cambridge Univ. Press, 1982, p. 42. 八月一〇日から三日間、チアノはベルリンに赴き出発にあたって、ドウチエは外相にポーランド戦争は全面戦争になるという警告をドイツに強く与えるよう要請した。彼等は戦争をさけることで一致していた。ドイツ側は依然真相をチアノにしらせない。チアノはいらだちをかきさないが、ヒットラーのポーランド戦争のかたい決心を知る。チアノはベルヒテスガーデンでヒットラーと会い、尚不戦を勧説するが、効は無く、ヒットラーはポーランド戦争は局地化されると主張し、全面戦争は総統とドウチエが若い間に戦わねばならぬ、といった。八月二日までドイツ側はイタリアに独ソ不可侵条約のことを具体的に知らしていない。二三日にチアノは、東京は抗議し、それは事態に大不満である、と書いている。この時期まで日本が耳をふさがれていたことに怒っている、と。

六 あ と が き

この段階では、あとがきを付することは、本来的でないと思われる。即ち、独ソ不可侵協定の締結までを叙述して、これが出てくるのが本来と思うからである。この小稿のしめくりとしては、従って以下次号につづくということになるであろう。ただいえることは、この段階では、ヒットラーは独ソ同盟にしかく、それ程は熱意を示していないこ

とが浮かび出るといふことで、また英仏側、特に英国、チェムバレン首相が英仏ソ三国会談に終始気乗り薄といった態度がみえみえといふことで、この点問題となるのは、こういつた独英仏三国を相手として、最後は、これらを手玉にとつて独ソ不可侵条約締結を成就し、それも最後はヒットラーからの矢のような催促をさせて、これを締結するというスターリンの外交手腕の大晴業性が際立つといふことである。これも会谈の秘密性と共にスターリンの底の知らない不気味な政治才能なのであろうか。とまれ、独ソ不可侵条約は、二〇世紀最大、最高の世界の運命を翻弄した怪条約といふことで、ここにはその締結への端緒にふれたといふだけをのべて小稿をとじたい。以下、英仏ソ会谈、同軍事会谈、独ソ不可侵条約締結経過、そして締結問題を取りあげたい。小稿の不備なる上にこの次第で、尚重ねて大方の御叱正、御教導を乞ひ上げる次第であります。